

**【解説】**

問1) RPRテストに関し、偽陰性化を疑う。

YES

NO

問2) TPHA法に関し、偽陽性化を疑う。

YES

NO

問3) 過去に梅毒に感染したが治療済みの患者と考える。

YES

NO

## 【解説】

問4) 問1、2で YES と答えられた方は、次に何を行いますか。

### (実施した確認試験)

1) イムノクロマト法を用いた簡易検査

結果 陰性

2) 中和試験

結果  $(\text{中和処理前測定値} - \text{中和処理後測定値}) / \text{中和処理前測定値} \times 100$

$(78 - 69) / 78 \times 100 = 11.5(\%)$

中和率50%以下であることにより 陰性

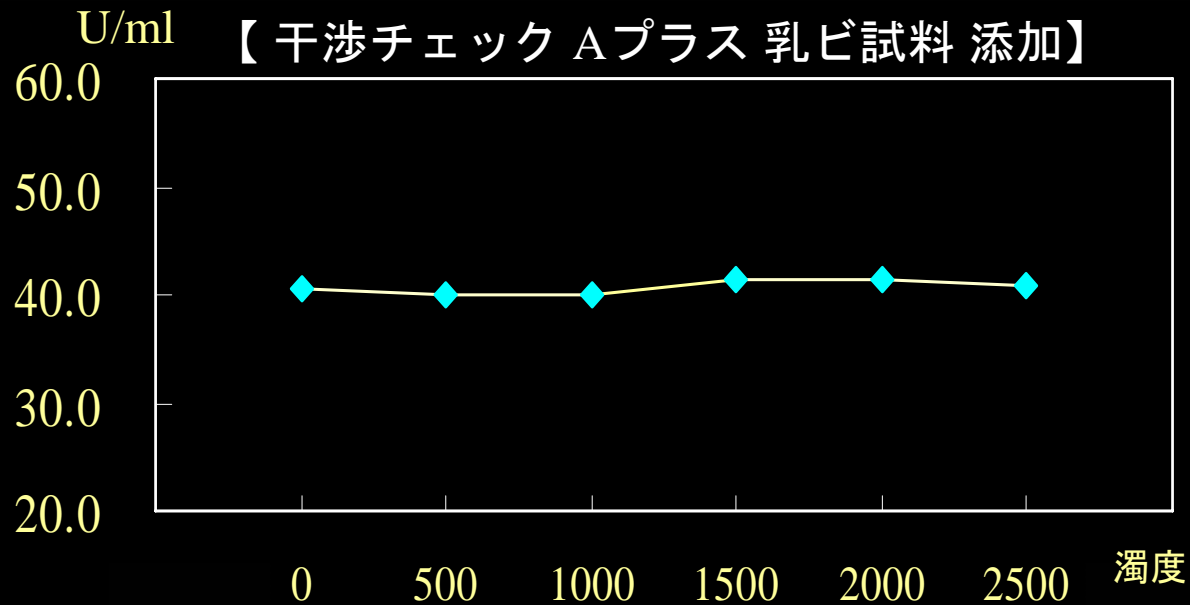
3) 混濁除去処理剤によるTPHAの再検査

結果:

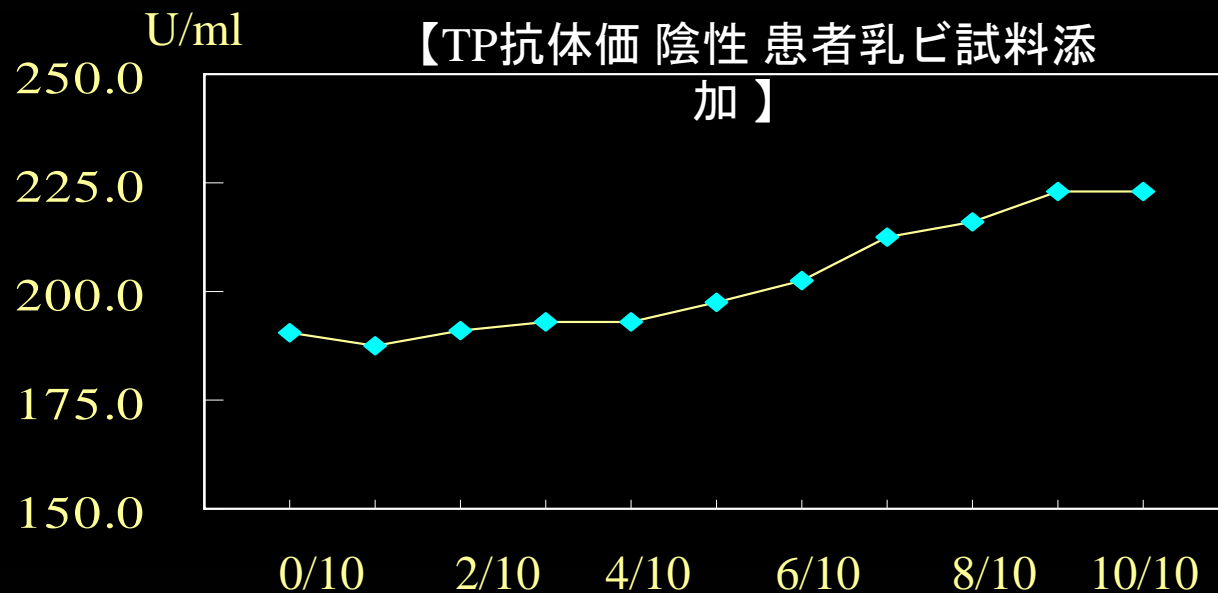
	処理前	処理後
対照試料	102	109
症例試料	78	< 1

対照試料(Blank)…TPHA陽性非乳び患者試:

# 共存物質試験に用いる妨害試料の反応性の違い

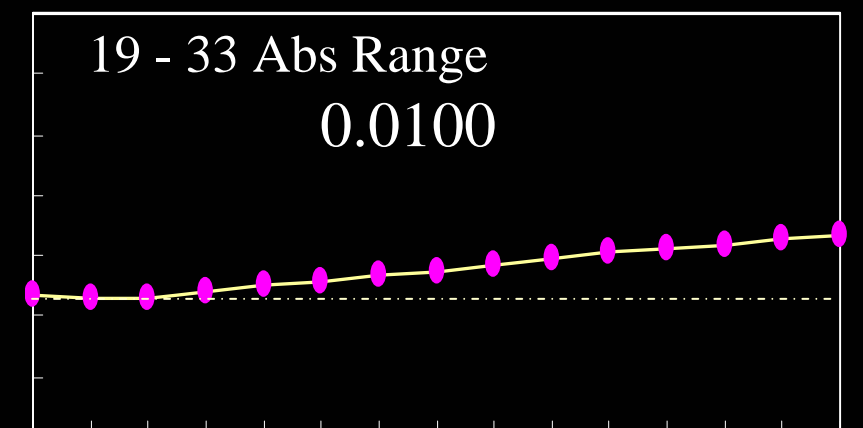
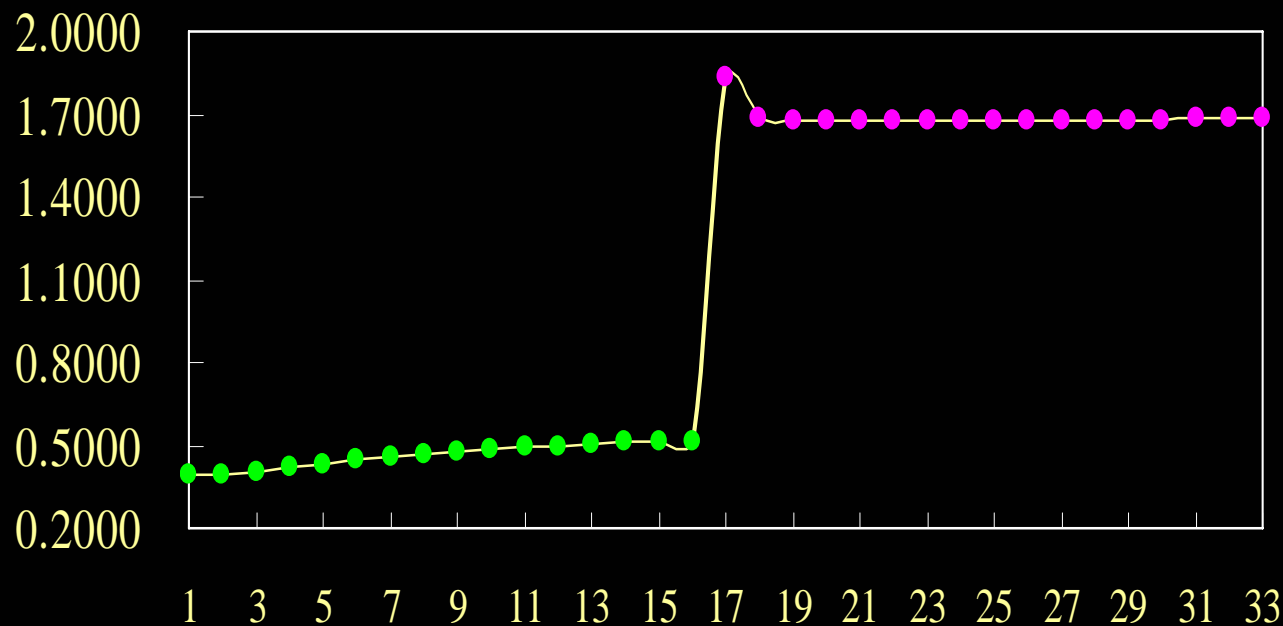


濃度	測定値(U/ml)
0	40.5
500	39.9
1000	40.0
1500	41.3
2000	41.3
2500	40.8



添加率	測定値(U/ml)
0/10	190.6
1/10	187.7
2/10	191.2
3/10	193.2
4/10	193.1
5/10	197.6
6/10	202.8
7/10	212.5
8/10	216.1
9/10	223.0
10/10	223.3

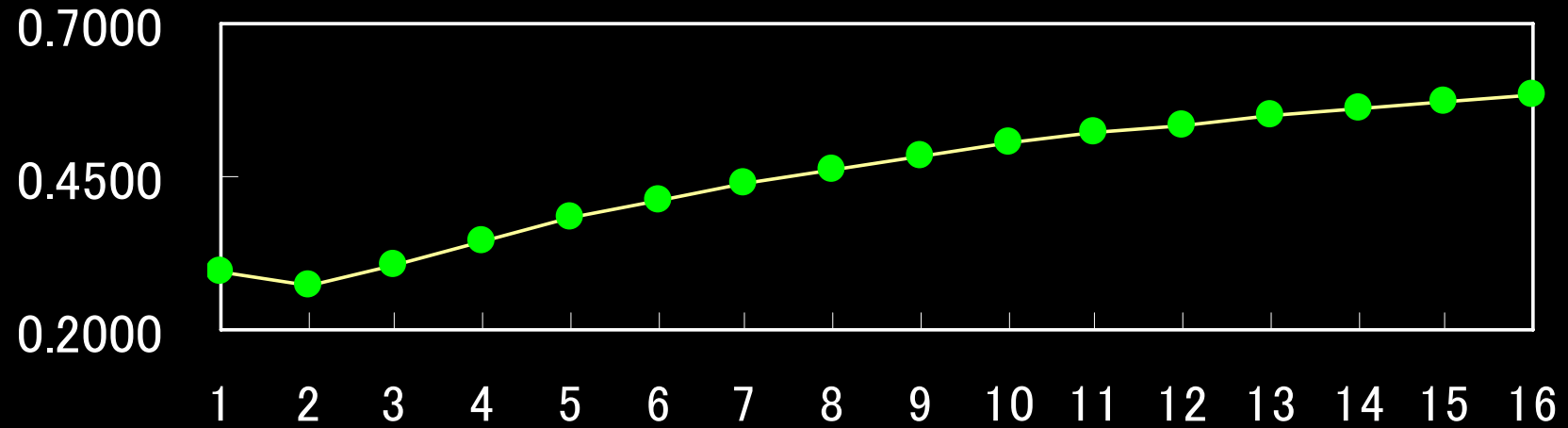
# TP抗体価陰性 患者乳ビ試料タイムコース



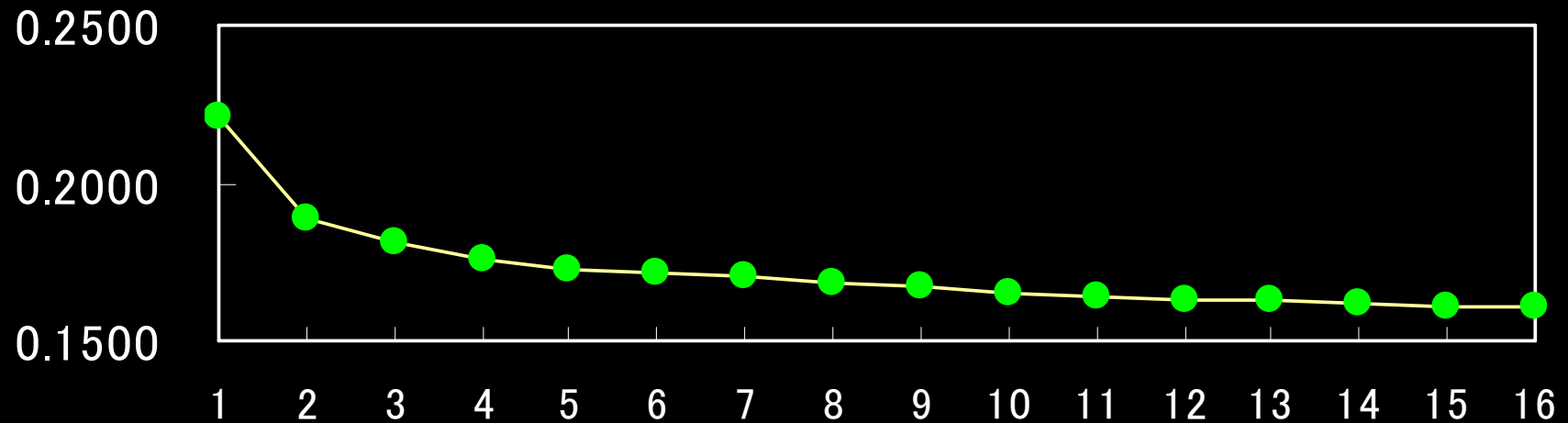
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16

19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33

### 第1試薬との反応



### 第2試薬（ラテックス除去液）との反応



問6) この症例患者についての梅毒検査結果は？

陽性 過去感染歴あり 判定保留

陰性

## (ねらい)

今日の検体検査は、迅速化、機器の集約化の一途にあり、特定機器専用試薬から

汎用試薬への改良が進み生化学汎用分析機への免疫項目の参入が増えています。

各試薬製造会社では、患者試料を入手する事は困難であり、製品の性能確認試験などは

擬似試料に頼るしかないのが現状です。

そこで少し考えてみてください。私たちの検査材料(相手)は100%の患者由来試料です。

擬似物質による確認試験の項目をいくら増やそうが、どれ程の意義があるのでしょうか。

相手が人である以上、採用時の最終確認試験は患者試料を用いて頂きたいと考えます。

また、専用試薬分析機では異常反応に対する検知機能が試薬ごとに備わっていますが、

汎用機対応試薬の測定パラメーターには、ほとんど基本設定のみの記述しか無く、検量線

より算出された数値を信用しているとは、非特異的な反応などや試薬の劣化、機器不良の

発見が遅れる場合があります。異常値が確認できた場合、再検査の前にまず、反応タイム

コース(吸光度変化)を確認してみてください。真の測定値は比色吸光度です。